車椅子を上げる従業員達は手慣れた様子で、青い顔の殉はそれ以上の肉体労働を強いられる事は無かった。老人はいつの間にやら姿を消している。
案内されたのは立派な客室だった。

「ジュン、まだ気分悪い？」
「少し楽になったよ」
「ワタシ、このままジュンがどうにかなっちゃうんじゃないかって心配だったよ」
「大丈夫。こんな見知らぬ土地にカナだけ残していくなんて絶対にしないから」

入り口の襖が開くと、顔を伏せた女将が膝をついていた。
軽く会釈し、そのまま部屋の中へと進むと二人の真正面に座る。
ゆっくりと顔を上げた。

「当館の女将を務めております衣笠貴子と申します。あいにく娘は出掛けていておりません。御用件はわたくしが承ります」
「ワタシ清水です、清水加夏子。彼は友達の堀川殉。私達、同じ病院に入院してた女の子を捜しに来ました」
「それは遠くから大変な事です」
「その子を連れていったのは恵美子さんなんです。女将さん、何か知ってる事ありませんか？」

二人を見据える貴子の目は清流の中の岩のようだった。綺麗だが微塵のゆらぎも見せない。

「少し前に、やはり東京からお見えになった方が娘を訪ねてきました。同じように、娘が女の子を連れていったと言っていましたが、わたくしには俄かには信じられません」
「証人ならいます。同じ病院の先生がそうだと教えてくれました。衣笠さんの実家がこちらだと教えてくれたのもその先生です」
「随分とその方をお信じになられているのですね。貴女はその先生とやらが嘘や憶測を言っていたとは思わないのですか？　そもそも貴女は患者さんでしょうに、どうやってこんな遠くまでその子を捜しに来たのかしら。入院する程の病気なら旅行の許可も出ないと普通は考えますわ」
「ワタシたちが嘘を言っているというんですか」
「今、初めて会った方を信用しろというほうが無茶だとは思いませんか、清水さん」

加夏子は言葉に詰まった。

…あの男…今度はこんな手を使って…

…手回しがよすぎじゃない…

…恵美子ったら、どこへ行ったのかしら…

…帰ってきたら話を…

貴子の目が驚きで見開かれた。

呟いた殉が顔をあげる。

「たぶんこれが、衣笠さんが碧ちゃんを連れ出した理由だと思います」

「そんな…あなた一体？…」
「見ての通り、ただのめくらです。チョット変わってますが」

心の中を覗かれて平気でいられる人間は少ない。
そして動揺した者は、内にしまっていた秘密を心の表まで引っ張りだしてしまう。
とっさに心を隠せる人間など居ないに等しい。

殉は貴子の『声』を聴き続けていた。渦巻く言葉の奔流を。
秀司、という名前が頻繁に現れては消えてゆく。

秀司さん　　婚約
壊れてしまった
秀司

あの娘、まだ彼を…　　しゅうじ

嘘よ
何の関係が
見つけるまで帰らない
シュウジ

見つけたの？
この子達は何者

あの探偵
本当なの？
秀司さん

恵美子

「秀司さん、と言うのですね、恵美子さんのフィアンセ。その人の所に行っているんじゃないですか」

貴子は今度こそ声も出せなかった。

「碧ちゃんも殉と同じ事が出来るんです。私、入院中に色々あってチョットおかしくなっていた時期があったんです。自分の中に閉じ籠もって誰も寄せ付けなかった。私をそこから助け出してくれたのが殉と碧ちゃんだったんです。誰にも聞こえない私の『声』を聞いて、手を差し伸べてくれたんです」

十畳の和室をしばし沈黙が支配した。窓の外には穏やかな青空が広がっている。

貴子の目が、徐々に平静を取り戻してきた。
気丈な女性なのだろう、暫くすると最初の動揺は拭ったように消え、二人を見つめる表情は凛とした女将のそれに戻っていた。

「堀川さん、でしたか。貴方が普通の方と違うという事は判りました。貴方がおっしゃるように、その碧ちゃんという

女の子も普通ではないのでしょう。ですが、それだけでは娘が誘拐まがいの真似をしたという事にはなりませんよ。理由がありません」
「僕たちにもそれが判らないんです。碧ちゃんでなければならない理由は一つしかありません、でも、恵美子さんはそれをどうしたいのか。まさか見せ物にする訳じゃないでしょうし、僕たちの知ってる彼女は患者をそんな風に扱う人では絶対にありませんでした」
「なら尚のことおかしいんじゃありませんか」

「…その人、病気なんですか？　恵美子さんの恋人…」

加夏子がボソリと言った。
貴子の表情が曇った。

「どうしてそう思うのかしら」
「判りません、ただそう感じたんです。ジュンが名前を口にした時の女将さんの顔、驚いてたケド、何だかすごく複雑そうで。母がよくそんな顔をしてワタシを見てたからかな」

貴子は視線を殉に振った。彼はもう口を開こうとはしなかった。
目の光が弱まり、溜息と共に彼女は口を開いた。

「どうやら、貴方達に隠し事は出来ないようですね」
「やっぱりそうなんですか」
「若年性アルツハイマー。手の打ちようがなかったのよ。あの子、随分苦しんだの。私も」

沈んだ声で貴子が言った。

「もしかして、恵美子さんは碧ちゃんを使ってその人を治そうとしてるんじゃないかしら。ジュンが私にしてくれたように。きっとそうよ」
「それは無理。あの病気は頭の中を壊してしまう。一度壊れた脳細胞は元には戻らないって、お医者さまもおっしゃっていたわ。恵美子は看護師です、そのことは私以上に判っている筈よ」
「でもそうとしか考えられないじゃないですか！」

加夏子は必死に食い下がった。
掴みかけた手掛かりの糸を切られまいと、貴子へ向かい矢継ぎ早に言葉をぶつける。
困ったような顔で貴子がそれを受け流す。

「…それ、出来るかも知れない…」

殉がボソリと口を開いた。

「前に聞いた事がある。脳の細胞はもの凄い数があって、壊れても他の部分がそれを補うって。それに普段使われていない細胞だけ数えたら国家予算も真っ青なんだって。もしその一部でも呼び起こす事が出来れば、もしかすると」
「ジュン、あなた何処でそんな事教えてもらったの？」
「九十九先生がね。お昼休みに、中庭の芝生の所で」

まじまじと顔を覗き込んでくる加夏子に彼は微笑んでみせた。

「本当に…　ほんとにそんな事が出来ると、あなたは思っているの？」

ひたと殉を見据えた貴子の目は恐ろしいまでに真剣だった。

「多分、無理でしょう。僕には」

殉はあっさりと言ってのけた。

「でも恵美子さんはそう思わなかったんじゃないかな。ほんの少しでも可能性に賭けた。碧ちゃんを連れてゆく理由としては充分です」

座敷は再び、重苦しい静寂に包まれた。